

2020年9月20日 礼拝説教要旨

詩編講解説教31「御手にゆだねて」

詩編31：2～9、ルカ23：44～49

詩編第31編は、人生に起こるあらゆる苦しみ、嘆きを想定しています。現在のコロナ禍もそうですが、わたしたちの人生では想定していない、いろいろなことが起こります。けれどもそこでこそ聖書は神さまの御手にゆだねる道を示します。信仰者はよく神さまにゆだねると言います。ゆだねるといのは、どういうことでしょうか。それは現実逃避でしょうか。そうではありません。むしろゆだねることが積極的にこの世の荒れ野に出ていく姿勢をつくります。

6節「まことの神、主よ、御手にわたしの霊をゆだねます」この「霊」というのは、創世記で言えば、人間に吹き込まれた「命の息」(2：7)であります。わたしたちを根底から生かす命そのものです。その命を神さまにゆだねるといのは、それが本来神さまのものであること、神さまから来たものであることを承認することです。わたしたちが生きているのも、土の塵になっってしまうのも、それは神さまの御手にゆだねられているということです。

ところが現代社会は、その感覚が麻痺しているように感じます。生命科学や医療の発達により命が操作できるという考え方に人間は支配されています。命は自分のものであり、命を所有しているという感覚があるのです。この世はあらゆる所有欲で満たされています。例えば、人は何のために働くのでしょうか。働いて車を買ひ、家を買ひ、美味しいものを食べ、旅行に行き、老後に何もしないで悠々自適の生活をする。そのために働くという人は多い。それならばたくさん所有し、たくさん消費するために働くということでしょうか。そうだとしたら、何か悲しい思いがします。そういう中で人は命も自分の所有と考えるようになります。自分で所有して安心する。今はなんでも買占めが起こりますが、人間は自分のものとした時に安心を得るのかもしれない。自分のものとするに確かなことがる。大岩、砦があると考える。でも本当にそうでしょうか。ルカ福音書が伝える愚かな金持ちの譬えを思い起こします。

手に入れられる時はそれでいいかもしれませんが。それで自分は安定していると思うでしょう。でも手に入れられない時、思い通りにならない時が必ずあるのです。特にわたしたちは今、非常に不安定な社会を生きています。自分のものと信じていたものを手放さざるを得なくなる。お金も健康も、社会的地位も人間関係も。自分のものと信じているものがあてにならないという経験をするのです。それでも自分のものとするに安心を見出すのでしょうか。それが確かなことでしょうか。

アメリカの神学者でウィリモンという人は、「信仰とは不確実性を受け入れることだ」と言います。人間の不確実性、そこに実は確かなことがある。それが命を支配されている神さまであり、そこでこそ人は神さまと出会う。その神学者は出エジプトのイスラエルを引き合いに出して説明しています。神さまはイスラエルをエジプトというある意味、安定したところから、何も無い荒れ野に連れ出しました。それは不確実性の中に強制的に連れ出したということです。だからイスラエルの人々は文句を言います。まだエジプトにいた時の方が良かったと。でもそのエジプトの安定さが彼らに本当に頼るべきお方、神さまを見失わせました。反対に荒れ野では食べ物も飲み物も保証されていない。そこで頼るべきお方はただ神さま一人だけという状況になる。そういう場所に強制的に身を置かれることによって、彼らは本当に大切なこと、神さま

がすべてを備えてくださることを体験的に学びました。事実、彼らの命を支えたのは神さまでした。神さまがマナを与え、岩から水を出して彼らを養いました。人間はすべてを手放した時に、その神さまの確かさに生きることができます。イスラエルが約束の地に入るまでの40年という期間は、彼らが神さまを見出し信仰的に成長するために必要な期間でありました。そういう人間の不確実性が本当に確かなものへと近づけるのです。それが神さまにゆだねるということです。

今日は教会の独立を記念して礼拝をまもっています。今から113年前、1907年に教会はすべての海外ミッションの援助を断ち切り、独立をいたしました。言わば独り立ちをしたということです。それは自分たちに確かなことがあるから独立したということではありません。むしろ経済的には厳しかった。援助を受けて入ればそこそこ安定していたでしょう。でも教会はあえて厳しい状況に、荒れ野に身を置いたのです。そこにはたくさんの困難がありました。戦争の時は、会堂もすべてを失う経験もした。でもそこでこそ教会は、神さまがすべてを備えてくださること、神さまにゆだねて生きることの確かさを学びました。

五十年史の最後は牛島敏雄さんの言葉で閉じられています。お父さんの牛島三郎さんから長老として教会の一時代を築いた人です。「戦前戦後と振り返る時、わたしたちは何か大きなものを失ってきたような気がする。わたしはそれを表現する適切な言葉を知らない。強いて言えば「馬鹿さ」とでも言おうか。最近あまりに社会が多忙になったためだろうか。人が自分の殻に閉じこもりがちになったためだろうか。それともあまりに合理的に考えるようになったからだろうか。人は互いに交わりを失い、だんだん迫力を失っていく。さあ、もっと真剣に聖書を読み、馬鹿的に求め、論争し遊び働いてみようではないか。そうすれば馬鹿的にデッカイ強い信仰に培われるのではないだろうか。坪井教会の過去には、そんな太い面があったような気がする」

太い面というのは、冒険する心と申し上げてよいと思います。あえて荒れ野に身を置き、神さまにゆだねて生きる強さです。やるだけやってあとは神さまに任せるような大胆さです。それは本当に確かな場所を知っている者の大胆さであり、積極性です。神さまにゆだねる時にそれが可能なのです。そしてそれがもたらすことがこの世にはない本当の自由であり救いです。

「わたしを敵の手に渡すことなく、わたしの足を広い所に立たせてくださいました」（9節）神さまが広い所に立たせてくださる安心がそこにあります。わたしたちの教会にはそういう太い面があった。キリスト者というのは、基本的にこの世に確かなものは何一つないという姿勢を持っています。こういう困難な時代だからこそ、人間が考えるちっぽけな安定や確実性に生きるのではなく、神さまにゆだねることの確かさに生きる者でありたいと願います。